令和3(2021)年度　学校評価総括表　　伊丹市立伊丹特別支援学校

教育目標	一人ひとりの自立と社会参加をめざし、たくましく生きる力を育てる
重点目標	①新学習指導要領の小学部本格実施を迎え、類型を意識したカリキュラムマネジメントを進める。②卒業後の進路や生活を見据え、肢体不自由特別支援学校としての取組の充実と地域への発信の強化　③安全で安心な学校づくり　④一歩進んだセンター的機能の充実　⑤校務分掌の見直しを図り、教職員が目標を共有し、学部・学年間や各分掌の連携でチーム力を高め、学校課題にタイムリーに対応できる体制づくりを目指す。 ⑥ゆとりと愛情が感じられる職場づくり

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	総得点 総合評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	一人ひとりの教育的ニーズに応じた弾力的な教育課程の編成 （教務）	（教務部） 〇個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用し、一人ひとりに応じた指導・支援の充実を図る。	〇個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、懇談で指導・支援の方向性について保護者と共有する。	〇「本人・保護者の願い」を踏まえて、指導・支援の方向性について保護者に説明したり、話し合ったりして、合意形成を図ることができる。	A(90%)	・個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、懇談で保護者と共有することができた。	・今後も個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、保護者と共有していきたい。	コロナ感染対策の必要性が必須の中で、授業においても様々な工夫がされている。引き続き、保護者と連携しながら子どもたちの学びを支えていってほしい。
	わかる授業の構築 （自立活動） （研究）	（自立活動） 〇相談を活用し、学部・学校全体で情報を共有して授業にいかす。	〇相談票の書き方や過去の相談内容を参照できるようにする。 〇クラスや学部等において動言内容を確認後、職朝くんを活用して開覧を呼びかけ、学校全体で情報を共有する。 〇相談内容や児童・生徒の状況により、ビデオを使っての相談も可能であることを周知する。	〇各種相談を活用できる。 〇他児の相談内容を教育活動にいかす。	A(85%)	・緊急事態宣言中は中止していた各種相談が、宣言後に実施できたことはとてもよかったが、行事や成績処理との兼ね合いが難しかった。 ・講師が来校できない状況が続いたが、新たな相談先の開拓や相談内容の工夫ができた。 ・急な欠席で相談できなかった児童・生徒がいたが動画などで相談してもらえたら良かった。	・感染状況により予定通り相談ができないことはあるが、延期や代案を立て行っていきたい。 ・予め動画を撮っておき、からだの学習会や各種相談で欠席した場合、動画での相談を行えることを改めて周知する。	
		（研究部） 〇研究テーマ 『「わかる・できる」集団の授業づくり』を目指し、授業研究に取り組む。	〇児童生徒の「わかる・できる」を実現するために、学習内容をスモールステップ化して分析・評価し、MTメンティーナーとSTサブティーナーが役割を共有し、チームで授業づくりを行う。	〇各研究グループが研究授業発表を実施し、研究全体会(全5回)で協議し、より良い授業づくりに努めることができる。	A(86%)	・今年度は、市内研究発表会の年度であり、4年間のまとめとして、5回の研究全体会を実施できた。(コロナ感染対策のため、録画授業の視聴。) ・各チームで、日々のより良い授業づくりについて、研究することができた。また、研究全体会では、対象の授業について、全教員でグループ討議でき、講師(梶教授)の指導助言も受け、チームの授業づくりに役立てることができた。	・4年間の研究(コロナで1年延長)を終え、来年度から新たな研究テーマを設定する。この4年間で積み上げた研究内容や協議の方法(グループ討議形式)をふり返り、新たな視点で課題を設定して次年度につなげる。 ・研究1年目の配当予算の中で、学校全体で研究を進め、日々の授業づくりを通して、児童生徒の学びの継続ができるように取り組んでいく。	
	卒業後の進路や生活を見据え自立して社会に参加する力の育成 （キャリア教育） （進路）	（キャリア教育） 〇児童生徒の発達段階や発達課題を踏まえたキャリア教育の推進・充実を図る。	〇キャリア教育全体計画を踏まえて、キャリア教育の視点から教育活動を展開する。	〇キャリア教育全体計画の「キャリア教育で児童生徒に身に付けさせたい力」を踏まえて、授業の年間指導計画を作成できる。	A(84%)	・キャリア教育全体計画を踏まえて年間指導計画を作成することができた。 ・キャリア教育全体計画の改定を進め、年間指導計画とキャリア教育の重点課題や教科との関連を明示した。次年度以降、活用を進める。	・改定したキャリア教育全体計画に基づいて、キャリア教育の具体的な目標を年間指導計画に活かせるよう、職員への啓発を図っていく。	キャリア教育でつけたい力について、言葉の出ない重度な子どもたちには難しい面もあると感じる。将来社会に出たとき、周りの人とどう関わっていくか本人の意思や希望をどう伝えるかなどが大切だと感じる。スモールステップで力をつけていってほしい。 進路については、卒業後の居場所というだけではなく本人の生きがいや楽しみも十分に検討してほしい。福祉サービスは申請しないと受けれないものばかりなので、何が本人に必要か保護者と連携し情報提供等してほしい。
		（進路） 〇児童生徒の適正や希望等を把握し、実態に応じた進路指導・支援を行うための情報について理解する。	〇進路説明会で行う資料やガイドブック等を配付し、進路指導や福祉制度に関する情報提供を行う。 〇進路だよりを毎月発行し、情報を発信する。	〇児童生徒の個々の実態を把握し、適切な進路指導ができるように福祉制度について理解する。 〇児童生徒が通う福祉事業所の活動について把握する。	A(84%)	・情報提供や情報収集への成果は一定の評価に値する。 ・福祉制度については刻々と変化するため、最新の情報を提供し、正確な情報を収集しておく必要がある。	・教員向け見学会は設定しているため、積極的に参加を促していく。 ・合同説明会を休日や平日の児童生徒がいる時間に設定するのではなく、長期休暇中に設定し、それぞれの教員が参加できるように進めていく。	
豊かな心・健やかな体	豊かな人間関係の形成 （各学部） （いじめ）	（小学部） 〇日々の授業を通して児童の人間関係づくりの基礎を学ばせる。	〇学部全体やクラスを超えた学習集団等を適切に編成する。	〇それぞれの集団学習の中で、児童が他者と関わる力をつけられるような内容や場面を設定する。	A(86%)	・各教科では、教師や友達と関わり、ともに学習を進めていく場面を設定することで、相手を感じ、仲間を意識できる学習を行うことができたと考えている。また、道徳や体育、生活等で、クラスを超えた集団を編成することで、異年齢の仲間とともに学び合うことができた。	・今後も、学部全体で行う授業や他クラスとの合同授業、縦割りのグループ学習を、年間を通して計画、実施する。	「コロナ禍だからできなかった」「コロナが収まったら・・」というとではなく、今後はWithコロナで感染防止は当たり前という考えにならないといけないのでは。コロナに関係なく子どもたちの安全につながるとも思う。感染対策を施し健康を考えていくことは通常の支援の一つになる。行事等も感染リスクを踏まえて実施できるよう考えていければ良い。
		（中学部） 〇人とのふれ合いを通し、コミュニケーションの力や相手を思いやる心を育てる。	〇校区交流や社会体験学習、日々の授業や学校行事の中で、多くの人と関わり合いを広げる。	〇学校の内外の多くの人と関わる機会を設け、生徒自身がコミュニケーション力を発揮し、相手とつながる体験をする。	A(95%)	・国語数学や生活単元などの集団の授業の中で、学部以外の教職員との関わりを持って学習をすることができた。また、トライやる・ウィークの学習では、資生堂や陶芸教室等の外部の講師や清掃業務の事業団の方と関わる中で、学び合うことができた。 ・新型コロナウイルス感染症の影響で校区交流が制限されたが、感染症対策を行いながら、積極的に交流をし、同年代の生徒とコミュニケーションを図ることができた。	・新型コロナウイルス感染症の対策をした上で、様々な人と交流することができるような活動形態（オンライン）を今後も継続していきたい。	
		（高等部） 〇人や社会と関わる中で、思いやりの心や責任感を育てる。	〇日々の学習や校外学習、職場体験実習などの活動で、多くの人と関わりを持つ。	〇校内外問わず、多くの人と関わり、自分の気持ちや考えを発信し、他者の考えを知る機会を多く設ける。	A(87%)	・グループ国数や道徳などの集団の授業の中で、校長先生や事務の人など学部の教師以外の人と関わりを持って学習をすることができた。また、学部の友達と役割分担をして作業学習を行うことで、自分や友達の得意なことを知ることができた。 ・コロナ対策のため交流及び共同学習が中止になったり、校外での活動が制限される場面が多かった。	・コロナが収まったら校外での活動を多く設定して、体験活動を充実させていきたい。	
	安心・安全な学校生活の推進 （校内保健） （医療的ケア） （危機管理）	（校内保健） 〇児童生徒の実態に応じて、健康の保持・増進をはかると共に命を大切にする心を育てる。	〇個々の状況に応じた配慮及び行事に係る健康管理を行う。 〇会議や研修で児童生徒の健康に関する情報共有をし、全職員で共通理解を図る。	〇校内における児童生徒の健康に関する情報共有、学校と医療の連携を図ることができる。	A(88%)	・感染症の流行により、学校医と連携をしながら行事や校内の対策を行った。 ・災害時の依頼書や校内の保健資料等を見直し、用紙を改定。また預かり物品や与薬についても見直した。 ・与薬の扱い等を明確化した。 ・来年度も、学校医と連携を取り感染対策も行いつつ、宿泊やプールなど安全に行事を行えるよう検討する。	・教員への研修を行い、啓発に努める。 ・安全に行事が行えるよう、近隣の病院や学校医と連携を取る。	医療的ケアについて保護者の要望に応えられなかったとあるが、丁寧に話をしながら進めていってほしい。伊丹特別支援学校では看護師の配置などはしっかりしてもらっており、登校時の看護師付き添い等も実施できている点は評価できる。 防災教育や防災計画の整備等にも今後取り組んでいくと言うことは良い。デイサービスでもいま福祉避難所として必要なものの整備等に取り組み始めたところである。またゆうゆうでも次年度からBCPの作成に取り組む予定である。校内だけでなく地域も一緒に取り組むことや個別の避難計画等の作成についても考えていければ良いと思う。学校運営協議会でも協議していきたい。
		（医療的ケア） 〇児童生徒の実態に応じて、健康の保持・増進をはかると共に命を大切にする心を育てる。	〇医療的ケア安全委員会の会議内容を職員会議や回覧などで連絡する。	〇疑問点を確認することができる。	A(86%)	【成果】 ・医療的ケア保護者向けパンフレットは完成し、今年度配布した。教員向けマニュアルは現在作成検討中。教員向け医療的ケアの夏季研修を新たに行った。入学希望者の保護者に向けて医療的ケアの説明を行った。医療的ケアと学校保健が関わる保護者の記入様式を複数改訂し、保護者の記入様式が減った。 ・宿泊学習や水泳指導などについて保護者と相談する事柄について、まとめた教員向けリーフレットを作成した。保護者アンケートを作成し、9月配布回収し、次年度の計画に反映した。 【課題】 ・バスや登校、付き添いについて、保護者より要望等を聞いているが、現行の設備・人員・制度では十分に対応することは難しい。	・教員向けマニュアルをもとに、次期夏季研修にて教員の理解を啓発する。入学を考えている子どもの保護者に向けて医療的ケアの説明をさらに適切に行う必要がある。	
		（危機管理） 〇危機管理マニュアルを作成したり、各種訓練を行ったりして、生命や心身等に危害をもたらす事象を最小限に食い止めるための力を育てる。	〇安全で安心して過ごせる環境を整えるために、点検表を元にした安全点検を定期的に行う。 〇「危機の予知」「危機の回避」「危機への対処」、「危機の再発防止」を念頭に置いた危機管理マニュアルの作成と周知を行う。 〇様々な緊急事態に対する防災教育・訓練を実施し、危機管理意識を高める。	〇定期的な安全点検を元に、補修等必要な箇所把握し、早急に対応することができる。 〇非常事態発生時、危機管理マニュアルを元にした組織的な対応を実践することができる。	A(86%)	・定期的な安全点検を実施したことで、担当の教室等だけではなく、児童生徒の安全を考慮した視点で施設や設備の安全について配慮することができた。そのため、普段は見落としがちな廊下や階段の安全も確保できた。次年度については、廊下や階段の安全担当者を置きたい。 ・新型コロナ禍の中だったが、より安全な対応ができたように感じる。次年度は、本校だけではなく様々な機関と働きかけながら児童生徒の安全を保障できる仕組みにしていきたい。	・火元責任者（安全点検担当者）の割り振りについて校内全域に行き渡るように組み替える。 ・年に1、2度ほど全職員で校内の安全点検を行う。 ・緊急担当マニュアルの改訂を行う。 ・防災への取り組みとして、外部アドバイザーを招聘して計画を進めていく。	
開かれ信頼される学校園	学校情報の積極的な発信 （ICT活用推進） （各学部）	（ICT活用推進） 〇校内のICT機器の活用方法を知る。ホームページで保護者に情報を発信する。	〇ICT便りの発行や研修等でICT機器の活用方法に関する情報を発信する。 〇各学部から週に1回を目標にホームページの記事を更新できるようシステムを整える。	〇校内研修やICT便りを読むことで、校内のICT機器の活用方法についてを知る。 〇個人情報の取り扱い等に留意しながらホームページの記事の作成の仕方を知る。	A(87%)	・研修会にて操作方を学ぶ機会を作り、ICT担当者や支援員から伝えることで、活用が進んでいった。しかし、ICT便りの配信が不定期になってしまい、発行することが滞ってしまった。 ・ホームページの記事を教員が作成することができるようになり、コロナ禍の中、学校の様子を多く配信することができた。保護者の学校評価でもその成果が現れたので、今後も継続して取り組んでいきたい。	・来年度は機器の導入や利用の仕方などをICT便りとして掲載し、発行していきたい。 ・ホームページの作成で細かなトラブルや操作で不明な点があったので、手順書に対策を載せ、共通理解を図り、スムーズに活用できるようにしていきたい。	ICTの活用という項目だが、中身として児童生徒の授業での活用か業務や情報発信の活用のどちらを評価しているのか。授業で活用等も進んでいるようなので、今後も有効な活用を推進してほしい。 また、ホームページの情報発信はおもに保護者向けであるのかもしれないが、広く社会に発信していくという視点が必要なのではないか。支援学校の役割として子どもたちの教育が第一であることはもちろんだが、地域への発信も学校としての役割である。 オープンスクール等も含め今後も情報発信をしてほしい。 保護者との連絡方法についても方法を工夫しながら細やかに行っていけると良い。
		（小学部） 〇積極的に授業の取り組みや児童の様子を家庭に伝える。	〇毎日連絡帳でそれぞれの児童の様子を伝える。 〇毎月学部通信を発行し、週1回ホームページも更新して学部の情報を発信する。	〇毎日連絡帳に授業や児童の様子を記入する。 〇月1回、学部全体の児童の様子を載せた学部通信と週1回ホームページの更新を行	A(91%)	・毎日、授業の様子や連絡事項等を連絡帳に記入することによって、保護者と連携を取ることができた。 ・日々の授業の様子や行事での児童の表情を学部通信やホームページで配信し本学部の活動を周知することができた。	・連絡帳等による保護者との連携は、今後も密にしていくように取り組んでいく。また、児童の様子等を発信していくツールについては、今後もよりよい方法を模索しながら取り組んでいく。	
		（中学部） 〇積極的に学校からの情報を発信し、家庭に開かれた学校を目指す	〇校内の掲示板、日々の連絡帳や毎月発行の学部通信を通して、学校における学習内容等について、家庭に伝達し、共有する。	〇掲示板では、中学部全体の教育活動について発信する。連絡帳や学部通信では、各生徒の学習について、より具体的な内容の伝達をする。	A(100%)	・日々、連絡帳に授業の様子等を記入し、保護者に頑張ったこと等を伝えることができた。また、iPadを持ち帰り、生徒の様子を動画や写真で伝えることもできた。 ・生徒の様子を掲載した学部通信を発行し、学習の様子をわかりやすく伝えることができた。 ・オンライン参観、オープンスクール等の行事で生徒の姿を見てもらうことができた。	・今後も生徒の様子をこまめに発信し、様々な方法で、保護者に共有していきたい。	
		（高等部） 〇積極的に授業の取り組み等を発信し、開かれた学校を目指す。	〇毎日連絡帳でそれぞれの生徒の様子を伝える。 〇毎月学部通信を発行し、週1回ホームページも更新して学部の情報を発信する。	〇毎日連絡帳に授業の様子等を記入する。 〇月1回生徒の様子を載せた学部通信の発行をし、学習の様子をわかりやすく伝えることができた。 ・オンライン参観、オープンスクールなどの行事で活動をしている生徒の姿を見てもらうことができた。 ・週1回ホームページの更新が滞ってしまうことがあった。	A(89%)	・毎日連絡帳に授業の様子等を記入し、保護者との連絡を密にすることができた。 ・月1回生徒の様子を載せた学部通信の発行をし、学習の様子をわかりやすく伝えることができた。 ・オンライン参観、オープンスクールなどの行事で活動をしている生徒の姿を見てもらうことができた。 ・週1回ホームページの更新が滞ってしまうことがあった。	・HPの更新を意識して写真を撮ったり、教員同士で声掛けをしたりして週1回のHP更新を行う。	
	一歩進んだセンター的機能の充実 （センター）	（センター） 〇校内教育支援委員会、ケース会議の　運営及び、校内の人材の育成につとめる。 〇特別支援教育における地域のセンター的機能の充実を図り、教育相談、巡回相談、学校園等コンサルテーションなど、各事業を円滑に実施する。	〇要請のあった授業への支援や研究等に参加する。 〇校内教育支援委員会、ケース会議の運営をする。 〇要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園コンサルテーション、肢体不自由専門支援を実施する。 〇特別支援教育実践講座の実施（8講座）運営をする。 〇伊丹市の巡回相談員として要請に応じて巡回相談、を実施する。	〇要請のあった授業への支援や検討会、グループ研究等に参加し、意見やアイディアを提示する。 〇校内教育支援委員会、ケース会議を適切に開催し進める。 〇要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園コンサルテーション、肢体不自由専門支援を実施する。 〇特別支援教育実践講座、受講者アンケートの実践的なテーマだったかを問う項目で6割の満足度を目指す。 〇他校の巡回相談員と連携しながら適切な対応ができる。	A(85%)	・要請に応じて授業の支援や検討会、グループ研究等に参加し、意見やアイディアを提示することができた。 ・1月時点で、校内教育支援委員会（計10回）、ケース会議（計1回）を開催し進めることができた。 ・要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園コンサルテーション、肢体不自由専門支援を実施した。 ・特別支援教育実践講座、受講者アンケートの実践的なテーマだったかを問う項目で実施した全8講座全てで、8割以上の満足度が達成できた。 ・他校の巡回相談員と連携しながら適切な対応ができた。	・今年度より始めた肢体不自由専門支援については、他の教員とも連携して内容をより充実したものにしていく。	地域のセンター的役割として2名のセンター教員を配置し、積極的に取り組んでいる。 今後も教材の紹介や提供など市内の肢体不自由学級への支援なども充実させていってほしい。

【学校関係者評価総括】
・コロナ禍でもICTの活用等様々な工夫をしながら教育活動を行っている点は良い。今後もWithコロナの視点で感染対策は当たり前として取り組む必要がある。多岐にわたる職員で連携し子どもたちの安全な生活と学力の向上に励んでほしい。防災計画等についても地域とも連携しながら充実させてほしい。

【次年度に向けての重点課題】
①子どもたちの命と安全を守るための組織的な取り組み
②保護者、地域、関係機関との連携と情報発信による開かれた信頼される学校づくりおよびセンター的役割の推進
③個別の指導計画にもとづき、将来を見据えた個に応じた適切な指導支援の実現とカリキュラムマネジメントの充実